

◇◆慶應義塾大学大学院経営管理研究科(ビジネススクール)
「実践的授業方法について考える」ニュースレター(第14号・2008/2/29)◆◇

ニュースレターの第14号をお送りします。今月から、東京国際大学大学院で臨床心理士養成教育における実践的授業に積極的に取り組まれている、溝口純二先生の連載を3回にわたってお送りします。

コンテンツ

本号のお知らせ
(イベント情報などをご案内します)

実践的授業法取組紹介
(実践教育に鋭意取り組まれている先生方の手記を掲載しています)

ショートエッセー
(実践的授業方法に関するエッセーを掲載しています)

■□本号のお知らせ.....

12月27日のニュースレターでご案内しました標記のシンポジウムにつきまして、最後のご案内を申し上げます。HPも合わせてご覧ください。

会合名称: 文部科学省「特色ある大学教育プログラム」シンポジウム
『ケースメソッド授業とケース教材』

日程: 下記1)2)同じ内容で開催します。

- 1)2008年3月 4日(火) 9:00~17:00 ←締切ました
- 2)2008年3月13日(木) 9:00~17:00 ←受付中(3/5 締切)

場所: 慶應義塾大学法科大学院ディスタンスラーニング室(三田キャンパス)

主催: 慶應義塾大学大学院経営管理研究科
日本ケースセンター(財団法人貿易研修センター内)

趣旨: ケースメソッド授業に触れる機会と、ケース教材を活用するための情報を提供する

1. より多くの大学教員にケースメソッド授業への理解を深めていただく
2. 経営教育以外での教育分野におけるケースメソッド授業実践情報を共有する

人数: 各回 100名

今回のシンポジウムでは、一つの大学から複数名の先生方のご参加をいただけるように 大きめの会場を用意いたしました。たくさんの先生方のご参加をお待ちしております。

対象：高校・大学教員、および一般参加者

参加費：2,000 円（教材費等）

（ただし会合終了後の交流会費は別途当日に徴収させていただきます）

応募方法：お申込はこちらから



http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/gp_4_2.html

..... □ ■ □

□ ■ □ 実践的授業法取組紹介

実践的授業法取組紹介

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先存取組を「私の履歴書」風に紹介してまいります。今月は、東京国際大学大学院で臨床心理士養成教育における実践的授業に積極的に取り組まれている、溝口純二先生の第1回です。

～ 臨床心理士養成における実践的教育～

東京国際大学大学院
臨床心理学研究科
教授 溝口純二先生

【第1回】臨床心理士養成への取り組み

東京国際大学大学院臨床心理学研究科は、臨床心理士の育成を主目的とした大学院です。2001年4月に東京国際大学社会学研究科から独立し、川越市にあるキャンパスのサテライトとして新宿区に開設されました。入学定員は博士課程(前期)が25名、博士課程(後期)が2名です。

まず、臨床心理士とは何かということ、説明しておかなければなりません。臨床心理士資格認定協会という財団法人が毎年行っている試験に合格した人が、臨床心理士の資格を持つことができます。認定協会の定義によれば、臨床心理士とは「学校教育法に基づいた大学・大学院教育で得られる高度な臨床心理学的知識と技能を用いて臨床心理査定、臨床心理面接、臨床心理的地域援助及びそれらの研究調査等の業務を行うもの」です。臨床心理士の活動の場は、教育機関、地方自治体、医療、福祉、保健、司法・矯正、産業、私立のカウンセリングセンターの分野など多岐にわたります。臨床心理士が教育現場で広く活用されている例として、小・中・高校のスクールカウンセラーが挙げられます。学校において臨床心理学の専門家として配置され、不登校やいじめなどの問題にコンサルテーションを行っていく立場として関わっていきます。まずは児童生徒や教師らとの関係をつくっていくことが重要です。そして、児童生徒についての知識、例えば発達心理学のことも知ら

なければなりません。幅広く高度な能力が求められる仕事といえます。

現在、臨床心理士の受験資格は認定協会指定された大学院を出ることが義務付けられているため、本学のような大学院が設置されていったわけです。認定協会の指定校となっている大学院は、平成18年3月の時点で全国で146校（1種116校、2種30校）にもものぼります。

本学は、財団法人臨床心理士資格認定協会から、臨床心理士の受験資格に関して第1種の指定を受けています。臨床心理士養成の大学院には1種・2種という区別があり、1種は博士前期課程（修士）課程を修了した後、もっとも近い期日に行われる臨床心理士試験の受験資格が得られます。3月に修了したなら、次の試験は半年後の10月です。ところが2種の大学院の場合、修了後に1年以上の実務経験を積まないと試験を受けることができません。つまり、大学院のカリキュラムと大学院の施設での実習により臨床心理士試験の受験資格を得られるのが1種指定校だということです。大学院が1種の指定を受けるためには、カリキュラムの中に実務経験に相当するものを持っていることが必要です。1種と2種の区別は認定協会で行われています。臨床心理士の資格を持っている教員の数や、それに合わせた授業の種類などの条件をクリアしていれば、1種指定校になるわけです。

本学では、臨床心理士というプロフェッショナルが持つべき能力や態度などを在学中に徹底的に身につけてもらいます。

本学の特色としてまず挙げられるのは、臨床心理学の実習を重視していることです。実習はそれぞれ複数の教員が担当します。現場で活躍している著名な教授も含め、大学院生はきめの細かい指導を受けることができます。臨床実習のための施設も充実しています。面接室、集団療法室、プレイセラピーや箱庭療法のための設備があります。研究科内の臨床心理センターでは、カウンセリングや心理療法の実践を通して学ぶことができます。教授陣のネットワークによって、学外での実習先も豊富にあります。在学している期間、大学院生の日常生活はいわば「心理臨床漬け」になります。

精神医学と密接な関係を持っていることも本学の特色で、2名の精神科医が専任教授として在職しています。院生は精神医学の研究法、診断法、治療法を直接、具体的に学ぶことができます。この2名の精神科医を含め、本学には臨床心理士の資格をもつ専任教員が7名います。

以上のように、実践教育を行うための環境が整っていることが本学の特徴です。では、そこで実際にどのようなことを行っているのか、今回は教育方法の具体例を紹介しましょう。

.....□■□

□■□実践的授業方法ショートエッセー.....

このコーナーでは、ケースメソッド教育をはじめとする実践的授業方法に関するショートエッセーを、毎月少しずつお届けしています。

第13回

臨床心理士の育成現場を想像する

今月から3回に渡って連載をお願いする溝口純二先生は、臨床心理士教育の実践者である。東京国際在学中に溝口先生に学んだという臨床心理士から、「現場で役立つのは溝口先生の授業」と聞きつけた筆者らは、先生を訪ねてニュースレターへの執筆をお願いしたのである。

このニュースレターではこれまで、技術経営、福祉経営など、筆者らのホームグラウンドである「経営」と接点のある教育領域を中心に扱ってきたが、今回は人間の心理を扱う教育領域である。正直に言って、筆者にも理解や想像が及ばない部分が多くあるので、素人としての視点を大切にしながら書き始めてみたい。

臨床心理士と言われて、筆者が最初に考えることは、人間が人間を理解し援助することの可能性と限界である。河合隼雄の著書に「人間理解は命がけの仕事である。うっかり他人のことを真に理解しようとし出すと、自分の人生観が根っこあたりでぐらついてくる」とあったが、この仕事をするには、知識やスキルと同様に、基本スタンスが重要なのだろう。だとすると、スタンスの確立も教育課題である。それだけでも、たいへん厳しい教育現場を想像してしまう。

臨床心理士の仕事は、原理原則に支えられている部分も少なくないだろうが、個別性も高そうだ。「臨床」という言葉の通り、悩ましい心理上の問題を抱えているクライアントが次々に現れるが。クライアントにしてみれば、臨床心理学に関するたくさんの論文を書いていて、自分の症状を理論で説明してくれる研究者よりも、他ならぬ自分が楽になれるように援助してくれる支援者こそが、もっともありがたい存在だろう。

臨床心理士は臨床現場を活動の舞台とする実践者である。実践はいつも個別性を伴っている。だから実践者たちは、10年後に直面する問題に興味がないわけではないが、いま目の前にある問題からも逃れられない。十人十色のクライアントに日々接していくこの仕事には、非常に高い個別対応力が求められる。

個別性という言葉から転じて、心理学における普遍性を求めていくと、臨床心理学というよりはむしろ基礎心理学に目が向く。伝統的な「心理学」と言えば、多くの人が想起するのはこちらだろう。基礎心理学は実験をベースとして、人間の知覚、認知、行動のありようを研究した成果の体系であり、多くの大学が以前から取り組んできた。

しかし、基礎心理学の守備範囲からは、臨床心理士の仕事にアプローチしにくい。実践の場での有効度は、基礎心理学より臨床心理学のほうが高いのだろう。学術的な前進に資する人材ではなく、社会の要請に応じて、心理面での悩みを抱えているひとりひとりの援助に当たる人材を育てる為には、臨床心理士の育成は実践教育によって行われなければならない。

臨床心理学が対象としている人間の心理面での不調という事象自体は昔から生じていて、対応もされていたはずだが、社会が次第にそれをクローズアップするようになった。この問題に対応するための専門家の育成機運が高まったことを受けて、財団法人日本臨床心理士資格認定協会が発足したのが1988年。そこで1種・2種の認定区分という枠組みができ、臨床心理士を育成するための大学院臨床心理学研究科が次々に開設されたのは90年代以降である。

このように、今日の臨床心理教育の枠組みは比較的最近になって形成されている。その意味では、資格認定制度を伴う大学院教育の歴史はまだそれほど古くなく、この教育領域における実践的教育方法に関する議論もこれからさらに重ねられていくのだろう。

また、少し意外だったのは、東京国際大学では、臨床心理学研究科の学生の7割ほどが心理以外の領域で働いていた社会人学生で、その中には学部時代に心理学を学んでいない人も少なからず含まれるということである。

臨床心理士の仕事は、従事者の適性や資質も大きく問われるはずなので、社会的にも成熟した大人が、自らの職業適性を経験的に理解した上で、使命感も高めてチャレンジすることには賛成だ。しかし、修業期間は2年間しかないことも見逃せない現実である。特に1種指定校では、1年分の実践経験に代わる内容の授業が行なわれなければならない。入試で入り口を絞ったとしても、2年間でかなり詰め込み、かなり鍛える必要があるだろう。実践的臨床心理士教育の現場は時間にも追われているのだと感じた。

修士課程のスタートのレベルと2年後のゴールのレベルを見据えて、2年間でどのようなストレッチを目指すのか。理想と現実の狭間で現実解を探求し、少しでもゴールを遠くに求めて試行錯誤を続ける先生方の意識下にはどんな思いがあるのか。また、授業運営をめぐる苦悩や達成感とはどのようなものか。次回以降も引き続き、溝口先生に語っていただけると幸いである。

（文章 竹内伸一）

.....□■□

このメールマガジンは毎月1回発信しております。

~~~~~

○お問い合わせ先

慶應義塾大学大学院経営管理研究科  
ケースメソッド授業法研究普及室（高木晴夫研究室内）

[kbsnewsletter@info.keio.ac.jp](mailto:kbsnewsletter@info.keio.ac.jp)

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/>

○慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 文科省特色GP事業ウェブサイト

<http://www.kbs.keio.ac.jp/gp/index.html>

~~~~~

発行者 高木晴夫

編集者 竹内伸一、住吉みどり

次号（第15号）は2008/3/31にお届けする予定です。

ご意見、ご感想、購読者のご紹介は kbsnewsletter@info.keio.ac.jp 宛に、また、メール送信先の変更を希望される方、購読を希望されない方、購読を中止したい方は、お手数ですが kbsnewsletter@info.keio.ac.jp までご一報

ください。次号発信日の前日までのご連絡に対応させていただきます。

当メールマガジンの内容を転載する場合は、ご一報ください。